”ヴォーリズ住宅の原点“

滋賀県指定
有形文化財

吉田悦蔵邸の由来

吉田悦蔵について

明治23年（1890年）生まれ。生家は神戸市の油商で、商売に進むべく滋賀県立商業学校（現滋賀県立八幡商業高校）に入学した。2年目の冬、若きYMCA派遣英語教師ヴォーリズが着任するや、彼の人格に感化されて友人とヴォーリズ宅に同居、そこで開かれるバイブルクラスを通じキリスト教に入信し、そこで結成された八幡学生YMCAの主事となった。

明治40年（1907年）、悦蔵の卒業の年、ヴォーリズは念願のYMCA会館（現アンドリュース記念館）を建て開館式を盛大に行ったが、翌月に教師の職を解かれてしまう。しかし、収入を絶たれてもヴォーリズは八幡に留まって伝道を続ける決意をし、悦蔵はそれに感激し実家を説得して一年間ヴォーリズと二人で行動を共にした。その後、悦蔵は三井物産の兵庫支店で働くも、ヴォーリズとの活動が忘れられず明治43年（1910年）近江八幡に戻った。

同年、一時母国に戻ったヴォーリズは建築学士レスター・チェーピンを伴って近江八幡に戻り、悦蔵と三人で建築設計法人であるヴォーリズ合名会社を設立した。一方、近江に「神の国」を建設するというビジョンを達成するため、近江ミッションという伝道団体をつくり、ウォーターハウス夫妻や悦蔵の母柳子などを招いて団体を次第に拡大させ、滋賀県各地にキリスト教伝道と西洋文化の種をまいた。

建築設計だけでなく、家庭薬販売、鍵盤楽器や望遠鏡などの輸入販売などの事業、伝道誌「湖畔の声」の発行、結核療養所（現ヴォーリズ記念病院）、学校（現ヴォーリズ学園）、近江兄弟社図書館などを実現していった。吉田悦蔵は常にヴォーリズの片腕として、実務のかなめとなって働いたが、太平洋戦争の最中、昭和17年（1942年）に52歳の若さで世を去った。

近江セールズ取締役、近江兄弟社理事長、同女学校校長、同図書館長、YMCA同盟理事、同志社理事、組合教会理事、滋賀県図書館協会長、滋賀県社会教育委員などを歴任、彦根高等商業学校と八幡商業学校で英語講師を一時務めた。

1913年頃初春のころの設計事務所の様子と同時期米国での吉田悦蔵

大正元年（1912年）秋頃撮影、建築現場の掘削土砂搬出
スーツ姿は監督する渡米前の吉田悦蔵

吉田悦蔵邸

池田町五丁目の土地は明治44年（1911年）に青年会館を訪れた富豪の娘メアリー・ツッカー女史の寄付金で購入された。その東側半分程の敷地で吉田悦蔵邸とウォーターハウス邸が同時進行で建てられ大正2年（1913年）に完成した。建築費はそれぞれの親族が拠出している。

この初期に完成した部分はヴォーリズだけでなく悦蔵、チェーピン、ジョシュア・ヴォーゲルも関わっており、この時期のヴォーリズ住宅は現存するものが少なく貴重である。住宅としては大きめであるのは邸内で伝道集会や文化教室を開くことや、ゲストを泊める余裕をもたせたミッションハウスの機能を持ちつつ、設計事務所としてのモデルハウスの役割も担った。

本館と附属の茶室は滋賀県指定有形文化財で、レンガ塀、家具23点、図面4点が附指定されている。また独立した茶亭は国登録有形文化財である。

大正３年（1914年）秋頃　第三棟のヴォーリズ邸ができた直後の近江ミッション住宅

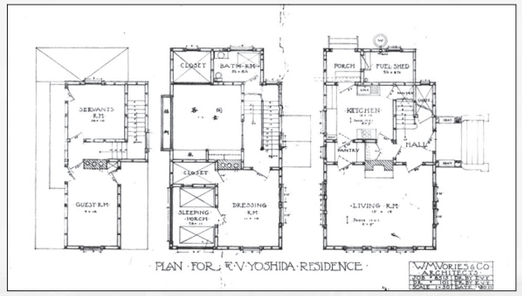
吉田悦蔵邸本館

大正2年築の（1913年）木造3階建、腰折れ屋根のアメリカン・コロニアル住宅で、明治43年（1910年）にヴォーリズ、建築学士のチェーピン、吉田悦蔵の三人で始められたヴォーリズ合名会社によって設計された初期の住宅であるためヴォーリズ住宅の原点とされる。二階に和室を一室設けた他は水洗トイレ付属のバスルームをもつ完全な西洋住宅で、現在もその当時のままをとどめている。

本館裏手に接続する和風建築は、大正４年（1915年）、洋式建物になじめない母親のために日牟礼八幡宮に所在した茶室を購入し移築したものである。

この部分は17世紀の建築といわれ、幕末に勤王の志士、頼三樹三郎が幕府の追手から隠れ住んだという言い伝えがあり、内部の柱には刀傷が見受けられる。建材に舟板の再利用がされていて味のある茶室である。移築当時は葦葺きであったが、後年金属屋根に模様替えされている。吉田悦蔵の交流から賀川豊彦、伊藤忠兵衛、下村宏、内山完造らが宿泊した記録が残る。昭和37年（1962年）、近江八幡市でオリエント学会が開催された折、学会名誉総裁であられた三笠宮崇仁親王殿下が泊まられた。

吉田悦蔵邸の当初図面　明治44年（1911年）秋作成



SOUTH/FRONT ELEVATION　明治44年（1911年）12月8日作成

八幡日牟礼神社から移築され本館と廊下でつながる茶室
（大正７年撮影）

レンガ塀

モデル地区としての近江ミッション池田町住宅地の東面を限る煉瓦塀も附の文化財になっている。当初は、煉瓦2枚厚積の間柱間の上部を網代組風の開放的な造りとしていたが、現在は煉瓦で埋められている。焼き損じのハネ煉瓦を使用して味わいある表情を造りだしている。

大正11年（1922年）のレンガ塀の様子。現在も雰囲気を留めている。

家政塾別館　茶亭　国登録有形文化財

洋館の左手に別棟となっている数寄屋造りの建物は、昭和１３年にヴォーリズ建築事務所が茶室づくりの専門家と組んで手掛けた純和風建築で、吉田悦蔵の妻、清野（きよの）が主宰した『家政塾』の和作法と茶の湯の教室として用いられた。

八畳大の床付き座敷を中核として，北に土間，西に四畳の茶室，南に水屋をはりだしている。

戦時中は俳優の故佐分利信氏が疎開で住んだこともある。

Japan Shiga
近江八幡

一般社団法人
近江八幡観光物産協会
https://www.omi8.com　当資料は吉田与志也様のご協力により作成しました。